

研 修 医 の 声

災 害 を 通 し て

長岡赤十字病院

椿 大 輝

皆様初めまして。現在長岡赤十字病院で研修医をしている椿大輝と申します。この度は、新潟県医師会報へ寄稿の御縁をいただき誠にありがとうございます。稚拙な文章ではございますが、日赤救護班として能登半島で活動してきたことに関してお届けいたします。

令和6年度能登半島地震は、令和6年1月1日16時10分に石川県能登地方を震源に発生し、最大震度7を記録しました。私たち住む新潟でも津波や住宅被害、液状化による地盤沈下などの被害もまだ記憶に新しいと思います。

私は令和6年2月9日から13日の5日間、能登半島にある石川県珠洲市で救護活動を行ってきました。派遣当時の珠洲市の被災状況は、死者102人（災害関連死の疑い6名を含む）、家屋倒壊は全壊3,298棟、半壊1,973棟、一部破損2,581棟、稼働している避難所は45か所で、避難者の総数は1,375人でした。ライフラインは電気・ガスは復旧していましたが、水道管が広範囲で壊れた上に道路が寸断されていたため、復旧作業が進んでおらず水道は市内全域で上下水道ともに断水が続いていました。実際に珠洲市へ向かう道中や珠洲市内で活動中に目にした街の様子は、多くの建物が崩れたままでがれきの撤去はまだ進んでおらず、最低限の補修作業で車両が通れるように舗装

され、市内各地の道路は地震による隆起や亀裂も見られました（写真1）。

現地では避難所を巡回して避難者の診察を行い、仮設救護所で診療業務を行いました（写真2）。診察では、上気道感染や持病の定期処方を希望される方が多かったですが、それに加えてこちらのケアも必要不可欠でした。災害により多くの方が日常の基盤を失い、長期化する避難所生活への苦悩を抱えていました。こちらのケアにおいては、医療的な介入ではなく、話をじっくりと聴き、寄り添ってあげることが大きな意味を持つのだと学びました。避難者が抱えている気持ちを話すことで少しでも心が軽くなる瞬間を感じたとき、医師としてだけでなく一人の人間として、相手に寄り添うことの大切さを実感しました。

この経験を通じて、医師としてだけでなく、人間として多くのことを学びました。災害時の医療は通常の診療とは異なり、迅速な判断と対応が求められますが、それだけではなく、患者一人ひとりの心に寄り添うことも大切だと感じました。医療の現場にいることの責任を再認識すると同時に、災害時における医療体制の重要性を改めて考えるきっかけとなりました。これからも、この経験を糧に、日常の診療でも患者さんに寄り添った医療を提供できるよう努めたいと思います。



写真1 倒壊したままの家屋



写真2 運営を行ったテントの仮設救護所